

# 学生も、学校も、地域も「自立」すべき

札幌国際大学 理事長・学園長

## 和野内 崇弘



わのうち・たかひろ氏

1975年札幌静修短期大学教授, 76年学校法人静修学園常務理事, 86年同理事長(現学校法人札幌国際大学)に就任。  
また, 90年静修短期大学長(現札幌国際大学短期大学部), 93年静修女子大学長(現札幌国際大学), 2004年同学園長に就任。  
日本私立短期大学協会副会長・北海道支部長, 全国大学実務教育協会会長, (財)短期大学基準協会理事, 北海道経済財政懇話会委員などを務める。

われわれのような教育事業はマクロの人口動態に大きく左右されますから、私は比較的早い段階から経営について危機感を抱いていたつもりでした。しかし人は、いい夢を見ているときには悪いことなど想像したくないものなのでしょう。やはり何らかの事態に直面してみないとなかなか本腰が入らないものだというところ、このところ私も痛感している次第です。

われわれ私学経営者に対して、「遠くから経営環境が悪化することはわかっていたのだから、なぜもっと早く手を打たなかったのだ」とたしなめるジャーナリズムがあります。そうした意見も甘んじて受けなければならぬと私は考えますが、そうは言っても、一般企業とは少々異なる事情もあります。それは行政の影響力です。たとえば、かつては地方でなければ大学はつくれなかった。ところが、規制緩和という名のもとに、都会でも許可が下りるようになった。行政のこうした方針変更をあらかじめ予想し、それを前提にして経営を考えることなど不可能です。学校経営にはそうした難しさが常に付きまとうような気がいたします。

かつて私学経営者は、3年寝ていても学校が潰れることはないと言われていました。しかし今は、3日寝ても潰れかねないと言われる。それくらい大変だという感覚は、私学経営者にはある程度共通しているのではないのでしょうか。

### 新しいものに飛びつくような経営はしない

本学の教育理念は「建学の礎」というかたちにまとめていますが、その要諦を一言で示すならば「自立」ということになります。個々の学生はもとより、学校自体もしっかり自立していくことが重要であると考え、私は馬鹿のひとつ覚えのように、「自立」という言葉を繰り返し、繰り返し、学内で発信しています。

たとえば私の入学式のスピーチは単純明快です。

「入学したら卒業しろ。卒業したら働け」

いったん入ったら絶対に辞めない。辞めなければ辞めないの価値はある。そして、卒業したらともかく働く。合う合わないなど考えず、ひとまず働き始める——そうした単純なメッセージでも自立して生きていくことの意義は十分に伝わっていると思います。おかげさまで本学には比較的挨拶のできる若者が多く、彼らにもこちらの意図することが伝わりつつあるのかもしれない。

「自立」は経営のキーワードでもあります。本学は、現在は銀行に依存している状況ではありませんが、かつては年収の3倍の借金を抱えた時期もありました。無論、人も学校もさまざまなものに寄り添い、支え合いながら存在していくものですが、過度に依存している状態は危険です。その点、銀行への依存も度を越してはいけないのではないのでしょうか。

本学は、今後も現在の自立した財務状況を堅持していく所存であります。つまり借金をせず、無理な背伸びをして新しいものに飛びつくようなことはしないつもりです。そうした経営スタンスを、消極的と思えず向きもあるでしょう。しかし私から見て、現状においては、借金をしてまで投資したくなるような魅力的な分野は見当たりません。私にも今取り掛かれば「当たる」であろうと思われる分野は想像が付きません。しかし、それをやったとしてどんな意味があるのでしょうか。数年間でブームが終わったからといって、すぐに取り止めるわけにはいきません。ですから、新たな分野には慎重にならざるを得ません。

### 北海道の恵まれた自然を活かしたい

個人も学校も自立すべきであり、同様に、地域も自立すべきです。しかしこの北海道という地は、未だ自立を果たしていないと私は見えています。多くの公共事

業によって支えられてきたという過去が、北海道から自立する力を奪ってしまったような気がしてならないのです。

北海道には自立に必要なだけの技術力と資本力が無いと言えます。北海道で育った優秀な人材は道外へと出て行ってしまいます。北海道で上った利益は中央の本社へと引き上げられてしまいます。つまり、人材も資本も北海道に蓄積されることが少ないのです。

地域開発という点で人材も資本も蓄積させることができ、うまく回転し得るものとは何か? そうした観点から立ち上げたのが本学の観光学部です。北海道は言わずと知れた観光地の宝庫です。海、山、川、湖と、これほどすばらしい自然を授かった地は他にありません。原材料費もかからない、これら自然の恵みを地域の自立に活かさない手はないはずです。

しかし、残念ながら北海道では、観光産業への評価は高くありません。地域の歴史が浅いためか、歴史に対するコンプレックスが根強く、「古いものはいい」といった考え方をする人たちが多いような気がします。「古い産業はいい」「古い企業はいい」「古い大学はいい」…そうした保守的な風潮がこれまで北海道の活性化を阻んできたように思います。そして、本学の観光学部と現代社会学部が思うような成果を挙げていない原因の一端もそのあたりにあるのではないかと私は見えています。

北海道に対して批判的な言動が多いため、私を道産子と思っている人は少ないのですが、私は北海道に生まれ、北海道に育ち、北海道のために役立ちたいと思って学校を始めた人間です。学園長となって13年が経ちましたが、未だその役割を十分に果たしたとは思っていません。観光学部や現代社会学部を中心とした本学の改革を今後も推進していき、すぐれた人材をできる限り輩出し、北海道や日本の発展に貢献できるような教育を継続していくことが、私の変わらぬ役割であると思っております。